

日本昔話「手なし娘」にみる精神性

千野 美和子

I、初めに

ここで取り上げる日本昔話「手なし娘」は、日本でも非常に広い分布を持つ継子話の1つである(稲田ら、1994)。また、グリメルヘン(以下、グリム)を初めとして世界中にも多く分布する昔話である。

筆者は以前日本昔話の継子話「米ぶき粟ぶき」について、継母と継子に実子を加えてその関係性について論じた(千野、2010)。今回取り上げる「手なし娘」も、継母から酷い仕打ちを受けながら最終的には幸せな結末を迎えるという点は、「米ぶき粟ぶき」と同じである。しかしこの物語では、他の継子物語のように継母が継子に無理難題を言いつけるというのではなく、「手なし娘」という題名の元となった「継子の手を切る」というエピソードが大きな特徴となっている。そして物語の展開の中で、無くなった手が再び生えるという印象深いエピソードが語られる。それゆえ、継母の仕打ちを乗り越えて幸せをつかんだ継子物語という点にとどまらない、失った手を再び回復した奇跡の物語として、語り継がれてきた面も大きい。奇跡を起こした存在として弘法大師や観音が登場することもあり、宗教的色彩の強い昔話と考えることもできる。心理学的にも、宗教性が表現された物語として解釈されている(Von Franz, M.-L., 1977: 河合, 1982)。また、豊田は女性性という視点から、この昔話を女性性の回復のプロセスとして解釈している(Toyoda, 2006)。また、織田(1993)は、この物語を元に境界性人格障害の治療論を展開している。また、韓国のユング派分析家であるイ・ユギョン博士は韓国の手なし娘である「手無し花嫁」の分析心理学的解釈を行っている(註1)。

筆者はかつてこの物語についてグリムと比較しつつ、物語の底流に日本人の宗教性が表現されていることを論じた(千野、2007)。本論文では、再度、諸家の意見を踏まえながら、日本人の精神性の特徴として表現された宗教性について考えたい。

II、昔話のあらすじ

昔、あるところに、仲の良い夫婦がいて、娘が1人あった。ところが、娘が4歳の時に母が死んでしまった。新しい母がきたが、継母は継子が憎くてならなかった。娘が15歳になった時、継母は父をそそのかして、娘を追い出すことにした。「娘、祭見さいこう」と父は娘を誘い出し、山の奥まで連れて行って、娘の両腕を切り落として、泣いている娘を置き去りにした。「ああ、悲しい。なんで、まことの父さまにまで、こんなひどい目にあわされるのか」と思って、谷川の水で切られた腕の傷口を洗って、娘は山の中で草の実や木の実を食べて生きながらえていた。

あるとき立派な若者が馬に乗ってそこを通りかかり、娘を見つけた。若者は「はて、人の顔かたちはしているけれども、両手がないが、そなたは何者だ」とたずねた。すると娘は、「私はまことの父さまからも見すてられた、手なし娘です」といって泣き出した。若者はわけをたずねるとほんとうにかわいそうだった。若者は「わしの家にくるがよい」といって、娘を家に連れて帰った。若者の母も心のやさしい人なので、娘をかわいがった。若者は娘のことが好きになり婚礼をあげた。そのうち、子供が生れることになった。若者は江戸へ上ることになり、あとのことを自分の母に頼んだ。子供が生れると、母は子供が生れたことを手紙に書いて、使いの者に頼んで、若者の元に早飛脚を立てた。

使いの者は途中で喉が渴いたので、水をもらいにある家に寄った。そこは手なし娘の生れた家で、継母は、かわいい男の子が生れたという手紙を、鬼とも蛇ともわけのわからない化け物が生れたという手紙にすり替えた。その手紙を読んだ若者は自分が帰るまで大切に育てるように書いた手紙を託した。今度は、その手紙が、継母の家で、娘も子供も追い出すようにという手紙にすり替えられた。

手紙を読んだ母はそのことを娘に話した。娘はたいそう悲しんだ。そうしてやっとのことで「母さま、片

輪者のわたしにかけて下されたご恩返し一つ出来ないで、出て行きますのは悲しいことだけれども、若さまの心とあればいたしかたありません。出て行きます」といって、娘は子供を負わせてもらって、泣く泣く家を出ていった。娘は行くあてもなく歩いていたところ、喉が渴いたので、流れのあるところで、かがんで水を飲もうとした。その時、背中に負っていた子供がずり落ちそうになった。びっくりして無い手で押さえようとすると、不思議なことに両手が生えて、しっかり子供を抱きとめていた。「やあ、うれしい、手ははえて来たよう」といって、娘はたいそう喜んだ。

江戸から帰ってきた若者は、事情を知り、娘と子供を探しに出かけた。若者は、流れのそばの社で子供を抱いて神さまに一心に祈っている娘と再会した。2人は喜んでうれし泣きに泣いた。その涙のこぼれる所には美しい花が咲いた。3人は一緒に家に帰ったが、帰るみちみち草にも木にも花が咲いた。継母と父は地頭に罰せられたという。

(関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山 日本の昔ばなし(Ⅰ)』より要約)

Ⅲ、この昔話のタイプについて

この昔話は、『日本昔話大成』では、「本格昔話」の中の、「継子譚」に分類される208「手無し娘」の類話として収録されている。関(1978)は継子譚として集めた話について『『継母』と『継娘』と称する少女との葛藤を主題とした一群の話を集めたが、国際的意味における継母とは米福糠福、手なし娘などきわめて少数である。西欧の昔話で、魔女、悪女として語られるものが、何故か我が国の昔話ではほとんど継母になっている。比較検討すべき重要な問題であろう」と指摘しているように、この話が国際的意味における継母の話であることを述べている。

関のあげているタイプは以下のようなものである(関、1978)。

- 1、継母が継子を憎んで腕を斬って家を追う。
- 2、長者の果物を盗み食いしているのを発見されて嫁になる。
- 3、夫は旅に出る。
- 4、子供が生まれたという手紙を途中で継母に追い出せと書きかえられる。

- 5、娘は子供とともに再び家を追われる。
- 6、娘の手が生える。
- 7、夫に発見されて幸福になる。
- 8、継母は罰せられる。

また関(1978)はヨーロッパの「手無し娘」のタイプを以下のようにあげる。

- A 娘が両腕を斬られる。
- 1 娘が父との結婚を承知しないため。
 - 2 父が娘を悪魔に売ったため。
 - 3 娘が祈祷を拒もうとするから。
 - 4 母の娘に対する嫉妬から。
 - 5 小姑が娘のことをその兄に中傷したから。
- B 王様が娘を森(庭園、小屋、湖)の中で発見し、不具者にかかわらず妃にする。
- C 娘は再び生まれた子供とともに追い出される。王様への手紙を、1、姑が、2、父が、3、母が、4、小姑が、または、5、悪魔が偽造したため。
- D 娘は森の中で再び奇跡によって両手が生ずる。
- E 再び夫に発見される。

そして、日本の話は、A4BC3DEの結合であるとし、「ヨーロッパの形式はわれわれの伝承ときわめて近く、これがはたして口承によったものかどうか疑問である」と口承による伝播の可能性を疑問視している。

また、稲田(1988)はこの208を「むかし語り」の「Ⅷ 継子話」の178「手なし娘」のタイプとして分類している。このタイプは次のモチーフからなる。

- 1、継母が実子を殿様の嫁にしようと継子の両手を切り落とし、継子は家をでる。
- 2、継子が口で蜜柑をもいで食べていると持ち主に見つかり、気に入られてその嫁になる。
- 3、夫が旅に出た留守に子供が生まれ、知らせの手紙を託すが、途中で継母に、鬼や蛇のような子が生まれた、と書き変えられる。
- 4、夫は大切に育てよ、と返事をやるが、途中で継母に、妻子を追いつせ、と書き変えられる。
- 5、家を追いつされた嫁が川で水を飲もうとし、すべり落ちる子を抱こうとすると手が生える。

6、夫が妻子を捜して旅に出、親子は再会できて幸せになるが、継母は手を失う。

稲田は、このタイプの同一タイプとして、ATのⅡ「通常の昔話」のA「魔法の物語」の「他の超自然的現象（存在）の物語」の706「手なし娘」をあげている。AT706のタイプのモチーフは、Ⅰ 両手を切り落とされた女主人公、Ⅱ 王との結婚、Ⅲ 中傷された妻、Ⅳ 両手が元どおりになる、からなる。また、稲田は「伝承の現状では結婚の部分を欠き、もっぱら継子の手の本復を語るものが多く、興味がその奇跡的運命に向いていることを示している。その援助者に宗教者（弘法大師など）や観音菩薩などがしばしば登場するが、川に落ちかけた子を救おうとして手が生えるという、より昔話的なモチーフは結婚と家出というエピソードなくしては存在しない」、また、「結末で継母は、子供の天へ向けて射た探り矢で失命ないし手を失い、罪業の必罰が強調されることが多い」と解説する。

本論で取り上げる昔話「手なし娘」は、関の分類、稲田の分類ともに、「継子譚（話）」に分類される。モチーフ2の「長者の果物を盗み食いしているのを発見されて嫁になる（関）」、「継子が口で蜜柑をもいで食べていると持ち主に見つかり、気に入られてその嫁になる（稲田）」の代わりに「山で木の実や草の実などを食べて生きながらえているところに若者が通りかかる」になる。しかし、それ以外のモチーフはすべて含んでおり、稲田の述べているように「より昔話的なモチーフ」を持つこのタイプの典型的な物語と考えることができる。また、関の述べるヨーロッパのタイプ、または稲田のあげるATの分類においても、すべてのモチーフを含んでおり、典型的な「手なし娘」のタイプの話であることがわかる。ただし、ATの分類では、「継子譚（話）」という分類はなく、「魔法の物語」の「他の超自然的現象（存在）の物語」の1つとして分類されており、「継子譚（話）」は日本独特のジャンルということができる。

Ⅳ、グリムメルヘンからみる物語の特徴

タイプを検討することによって、この昔話は、ほぼ典型的な日本の昔話「手なし娘」であることがわかった。この章ではヨーロッパの「手なし娘」の1つであるグリムの「手なし娘」について取り上げる。

グリムの「手なし娘」は次のような物語である。要約を提示する。

粉ひきの貧乏な男が、森の中で会った老人に水車の裏にあるものをくれるなら金持ちにしてやるといわれ承諾する。男は家に帰ってから、水車の裏にいたのは自分の娘で、その老人は悪魔であったことを知る。娘は信心深い子どもで、神様を敬い清らかに暮していた。悪魔が娘を連れに来ると、娘は水で身を清めたため、悪魔は手が出せなかった。悪魔が2度目に来たとき、娘は両手をあてて泣いたので両手が浄められていたために、悪魔は男に娘の手を切るように命令し、父はその通りした。しかし結局悪魔は娘をあきらめるしかなかった。娘は自ら家を出ていき、王の庭にやって来た。神様に祈り、天使の助けを借りて、庭に実っている果物を食べて空腹を静めた。王は信心深い娘を妃にした。王は娘を母に任せて戦争に行った。娘は子どもを生み、そのことを母は手紙で知らせた。しかし、信心深い娘に害を加えようと、悪魔が手紙をすり替えて、娘を城にすることができないようにした。娘は子どもを連れて、目を泣きはらして立ち去った。大きな森に入ると神様に祈った。すると天使が現れて小さな家に連れていった。その家で、娘とその子どもは神から送られた天使によって親切に世話をされた。信心深いため神様の恵みで切り取られた腕が元のように伸びてきた。戦場から帰ってきた夫は事実をしり、7年間妻子を探して、2人のいる小さな家にたどり着いた。そこで、3人は再会し、母の待つところへ帰った。そしてもう一度結婚式を挙げて楽しく暮した。（高橋健二訳『グリム童話全集Ⅰ』より要約）

以上、グリムメルヘンのあらすじをあげた。これを日本の昔話のタイプに当てはめると、関、稲田のタイプの、「腕を切る主体」、「手紙のすり替えの主体」が継母ではなく悪魔であること、「罰を与える」ことが無いほかは、すべて同じモチーフを含んでいる。日本の話ときわめて類似した話であることが分かる。

グリムでは、主人公は物語の初めから信心深い人物として描かれている。そして、継母の代わりに悪魔が登場し、悪魔が物語の筋を運んでいく。その一方で、悪魔のせいで困難に陥った主人公は神から使わされた天使によって常に守護される。そして、手が生えるということが、「魔法の物語」に分類されながらも、「魔法」ではなく「神の奇跡」から生じたことが強調され

る。グリムの主人公は神への信仰によって、無くなった手を取り戻し、王である夫との2度目の結婚、いわゆる幸福な結末を果たす。主人公の信仰の強さは、並大抵のものではない。父から手を切られたり夫の命令で城を追い出されたり過酷な出来事にあっても、神への信仰を捨てることはない。悪魔の娘への仕打ちは彼女の信仰を試す行為であるかのように見える。そう考えるとフォン・フランツ (Von Franz, M.-L., 1977) も述べているように、娘の信仰をめぐる悪魔と天使の戦いが行なわれており、最後は天使が勝利する物語とも受け取ることができる。悪魔の誘惑にも負けずに信仰を貫いた結果奇跡が生じたというキリスト教の奇跡の物語ととらえることができる。その意味で、この話はきわめて宗教的色彩の強い物語であると筆者は考える。

ここであげた話は、グリムの定本とされる第七版のものである。次に初版に収録されている「手なし娘」(吉原・吉原訳『初版グリム童話集1』)をみていたい。

父に手を切られて家を出ていくまでの話は第七版と同じである。その後、初版では、娘は体で木を揺すり、実が落ちてくると、身をかがめて歯で実を拾い上げ食べたところを発見され、牢屋に入れられる。しかし、王子の取り成しでニワトリの世話をするようになり、その後王子と結婚する。初版では、娘は神に祈ることをしないし、天使も登場しない。

次に子どもが生まれ、悪魔による手紙のすり替えによって、娘が子どもとともに、城を出るところは同じである。その後、初版では次のようになる。娘はある深い森の中の泉にやってきた。そこにいた親切なおじいさんの助けを借りて、娘は子どもに乳を飲ませた。おじいさんは「あそこに一本太い木が立っているから、そこへ行っておまへの切られた腕を3回その木にからませなさい!」と言った。そこで娘がそうすると、両腕がまた生えてきた。それからおじいさんは一軒の家を指して、あそこで暮らすように言った。初版では、不思議なおじいさんの助言はあるが、ここでも祈りと天使は登場しない。そして、探しに来た夫と再会して城に帰る結末は同じである。

以上のように、初版と第七版の大きな違いは、第七版では困難に際し娘が祈ると天使が登場して娘を助けたが、初版の最初の困難には娘は自分の力でなんとか乗り越え、次の困難にも、親切なおじいさんは登場す

るが、天使が登場しないことである。つまり、第七版では悪魔と天使の戦い、そして神による奇跡というキリスト教的世界観が色濃く表現されているのに対し、初版では悪魔は登場するもののキリスト教的世界観はそれほど強くないことである。そのかわりに、初版では助言をするおじいさんと癒しの力をもつ木が現れる。そこにはキリスト教が浸透する以前の宗教観、木に癒しの力が宿るとする自然への信仰がうかがわれる。筆者は、むしろ初版の話にこそこの物語の本質が表現されているように思われる。つまりキリスト教的な色彩が入る前のエッセンスが素朴に表現されているのが初版の話であると考えることができる。

この物語の中心は、手を失った娘がどのようにして手を回復するかである。失った手が再び生えるというのは、不思議な出来事である。この不思議な出来事をどのように語るかによって様々な物語が生れる。そこに人間を超えた力が働いていると考えるのは心の自然な動きである。筆者はそこに宗教性が表現されると考える。河合(2006)は「理由を超えた存在というものがあって、そのはたらきに対して、畏敬の念、畏れの念をもってそれを見る態度、それが宗教性である」と述べる。筆者は河合の述べる宗教性を元として、次のように宗教性をとらえたい。すなわち、宗教性とは、特定の宗教を指すものではなく、人間の力を超えたものがあることを信じ、そのようなものを尊重する態度である。その点で、この物語はもともと宗教性が表現された昔話だと思うのである。

V、類話から日本の昔話の特徴を検討する

この日本昔話「手なし娘」にも、前章で考察したような宗教性があることを、類話を交えて検証したい。かつ、類話とグリムとも比較しながら、この昔話の独自の特徴についても検討する。

まず、娘の手を切る主体である。グリムのそれが悪魔であるのに対して、日本のそれはほとんどが継母である。直接手を下すのは父である場合も多いが、そのようにそそのかすのは継母である。そして、その後の展開で手紙をすり替えるのも継母であり、日本の話では悪魔の役割をほとんど継母が担っている点が特徴的である。つまり、日本では悪魔のような宗教的存在が登場しない代わりに、継母が悪を表現し、その母性の

負の力が物語の展開を進めていくのである。日本において悪魔といういわば元型的存在を人間である継母が担う。この現象は、前述した関（1978）の「西欧の昔話で、魔女、悪女として語られるものが、何故か我が国の昔話ではほとんど継母になっている」という指摘ともつながるものである。また、類話には、稲田のあげたタイプのモチーフ1のように、実子が登場するものもあり、実子の関与度によっては、後述する罰を実子も受ける場合がある。

さて、手を切られた手なし娘は山の中で草の実や木の実を食べて生きながらえていたところを若者に発見される。タイプにあげられているモチーフ2の「長者の庭にある果物の実を盗み食いする」と同じものが最も多く、グリムのそれも同じである。天使の助けのあるなしの違いはあるものの、グリムの第七版も初版もこのモチーフである。王（子）との結婚にスムーズにつながり、昔話的なモチーフであると考えられよう。それに対して、ここで取り上げる昔話では、父に捨てられたその場で、山に生えている実を食べて自力でなんとか命をつないでいく。この場面は昔話的というより現実にもおこりうる行為とも受け取れる。しかし、豊田（Toyoda, 2006）が「自然に養われた」と述べるように山にある草の実や木の実という自然が彼女を養った、世話をしたと理解することができる。類話の中には「熊に助けられ養われる」「山で鳥に養われる」「猿が手当てして餌をやって養う」など、山の動物が主人公を助けるという話もある。ここには日本人と自然との関係がうかがわれる。日本人にとって自然とは人間に敵対するものではなく人を育むものとしてとらえられており、その自然観が表わされていると思われる。その意味で、この物語にはより日本的なイメージが表現されている。

継母による手紙のすり替えによって娘は家を出る。このモチーフは物語を展開させる重要なものであり、この物語の筋として欠かせないものである。そのせいか多少の違いはあるもののモチーフのパターンはほぼ固定している。この物語において、手紙のすり替えは悪が入りこめる唯一の方法かもしれない。それほどに手なし娘の周りにいる人物（夫、その母）は、善良に描かれている。

家を出た娘は、水を飲もうとして、背中に負ぶっていた子どもがずり落ちそうになり、無い手で押さえよ

うとすると、不思議なことに両手が生えて、しっかり子どもを抱きとめていた。この物語では、手が生える出来事を以上のように語っている。稲田のタイプのモチーフ5に挙げられているエピソードと同じであり、日本の「手なし娘」の中で最も良く知られている話とみなすことができる。ここでは、ただ「不思議なことに」と語り、手が生える不思議な出来事が何故起きたのかは説明していない。しかし、類話の中に理由を述べたものを探ることができる。グリムの神に代わるものとして、弘法大師や観音などのおかげで手が生えたと語るものが多く、日本においては弘法大師信仰や観音信仰が、手が生えた不思議を説明する理由に挙げられており、いわゆる宗教物語になっている場合もある。また、グリムの初版のように白髪の老人、和尚、助けた魚の教えをその通りしたことによって手が生えるというものもある。そして、自然信仰も日本の物語に登場する。「川や泉で水を飲もうとして」、あるいは「川から手が流れてくる」などバリエーションはさまざまだが、不思議な出来事が川や池など水辺で生じていることから、水への信仰がうかがわれる。不思議な出来事がおきる理由として、神などの超越的存在を仮定するのは、グリム同様日本においても同じである。ただ、そこに据えられるのは日本的な神や信仰が対象となる。不思議な出来事をどのように説明するのかは文化によって異なるが、共通してあるのはそのような不思議な出来事を受け入れ尊重するという精神性、すなわち宗教性である。そして、特記したいことはここで取り上げる話のようにあえて神などの説明をしない物語が日本においては一般的であるという事実である。神という存在では表現できない別の宗教性が日本にはあると考えられる。

娘が流れのそばの社で祈っていたときに、探しに来た夫と再会する。この話では最後に祈りが登場する。そして、涙のこぼれるところには花が咲き、3人の帰るみちみちにも花が咲いた。この物語に表現されたもう一つの不思議な出来事である。語り手は、「どうしたのか」と語るだけで、理由を述べないのは、手が生える場面と同じである。不思議な事を不思議だと受取り尊重する姿勢がここにみられる。神など超越的存在がなくても、この物語では不思議な出来事、すなわち奇跡が起きるのである。それは人が生みだした奇跡であり、人と人との出会いにおいて生じる奇跡である。

最後に、継母への罰についてである。悪事を働いた罪として、類話の中にも罰を語るものが多い。悪いことをすればその報いがあるとする民衆の思想であろう。類話の中には、稲田が述べているように「矢が当たり死ぬ」、「盲目になる」など様々な罰が加えられるが、「継母の手がとれる」という罰が、娘の手が生えることと連動して起きる場合が少なからずある。そして、実子も同じ罰を受ける場合もある。この罰においても、不思議な出来事が語られ、中には「弘法大師に手を奪われる」と宗教的存在が罰を下すものもある。ここで取り上げる話では、「地頭に罰を受ける」という社会的な規範に則った処罰である。

以上、日本の「手無し娘」について、類話を通して検討した。ここからわかることは、日本の話においても、観音や弘法大師など宗教的存在が登場する話や水の信仰がうかがわれる話があり、手が生えるという不思議な出来事が宗教的なものによって説明されようとしていることである。つまり、日本の昔話においても、「失った手が再び生える」という不思議をどのように語るかということは、グリムと共通しているのである。

今までみてきたように、「手無し娘」には、神や自然への信仰を含めた宗教的テーマが見られ、多分に宗教的色彩の強い昔話であることが理解できる。ここで語られる奇跡ともいえる不思議な出来事を説明するためには宗教的なものが必要である。逆に、むしろここに込められた宗教性を語るためにこれらの物語が生み出されるのではないだろうか。

一方、類話と比較しながら、ここで取り上げる「手無し娘」の特徴をみてきた。この話には、自然への信頼や神への信仰がみられるが、物語の中心的な不思議を語る時に宗教的な説明を使用しない。「ふしぎなことに」と語るがそこに神や超自然的な存在を仮定しない。仮定しないがゆえに、その不思議は聴く人の心に深く沁み込み、その人の内側から不思議体験を呼び起こす。この物語で語られる宗教性は神や超自然的な信仰ではない何かである。

Ⅵ、悪を担う継母

この物語は宗教性という特徴をもった話であると同時に、日本では継子話の1つに分類される。まず、継子話という視点から物語の始まりをみてみたい。主人

公の手なし娘は4歳の時に母を亡くし、新しい母がやってくる。15歳になったときに継母にそそのかされた父によって、手を切られ捨てられる。実母の死、そして継母の継子いじめが主人公を母なる世界から分離し新しい世界へ、すなわち個性化へと導いていくことは、この物語においても同じである(千野、2010)。しかし、一般的な継子話では、主人公は継母から言いつけられた無理難題を周囲の助けによって解決しその後幸せな結婚をして物語は終わりとなる。

継子を個性化に向かわせるのが継母の役割であるが、この物語に登場する継母は他の物語に登場する継母に比べて一層凄まじい仕打ちをする。手を切り山に捨てるという残忍な行為によって死ぬほどの危険を継子に直面させるのである。継子はその危険を乗り越え若者と出会い幸せな結婚をするが、この物語ではそこで話は終わらない。継母が再度登場し主人公に試練を与える。その試練を乗り越えて再度若者と出会うのである。この物語はグリムの「歌ってはねる、ひばり」のようないわゆる女性の結婚後の「真の異性との出会い」のテーマが描かれているともいえる。主人公は結婚後もさらなる個性化を進めていく。その点で通常の継子話以上の主人公の個性化が表現されている。この主人公の個性化がどのようなものであるかは後述するが、それだけの個性化を推し進める力としてグリムの悪魔に匹敵する強力な力を持った継母が必要だったのである。

ここで登場する継母は、元型的な悪を担った母性の否定面を表しているといってもよい。このような元型的な悪といえるものが、悪魔でもなく、魔女でもなく、一人の人間である継母に投映される。なぜこのような悪を担うものとして継母が登場するのかについて、ディークマン(Dieckmann, 1978)は「父権制社会の特質によって抑圧されていて、性悪で破壊的性質を持つようになった、大きな力をもった女性的なるもの」と述べているし、日本の話において豊田(Toyoda, 2006)は「女性の否定的な側面は他の国より日本において力を与えられているかもしれない」と指摘する。どちらにおいても、文化の中で生じた女性の否定的な側面が、継母に投映されて、大きな負の力を持ってしまった有り様を説明している。

なぜ、継母がこのような仕打ちをするのかについて考えてみたい。継母が継子の手を切る動機である。継

母の行為は、理解しづらい残酷な行為として受け取れる一方、その行為の背後に個人の母親あるいは女性として理解できる心情を読み取ることができる。この物語を聞く者、特に女性は、主人公の継子の筋で物語を聞きつつも、継母の行為に対して、非人間的で残酷だと切り捨てられない思いを抱くのではないだろうか。それは、個人を超えた元型的な重荷を背負わされた女性への共感である。ここまでの残酷な行為をせざるを得なかった継母の心情をたどってみたい。

いくつかの類話には実子が登場する。この場合、継母は実子を殿様の嫁にするために継子の手を切る。継母は純粋に実子の幸せを願って行なったものであり、正しいかどうかは別として、わが子を愛するあまりに行なう行為としてその動機は了解可能である。子のために行なう母の行為は、母性のなせるものといっていよい。しかし、物語の結末でわかるように、このような母性愛は子どもの成長にとって、マイナスにしかならない。

この物語では、実子は登場せず、継母の継子への思いが描かれる。継母は初めから「憎くてにくくてならなかった」ので「どうにかして追い出したい」と思っていた。憎い気持ちはずっと続き、娘が15になった時に父をそそのかして娘の手を切り落とさせた。娘の結婚後、娘が活着しているのを知って憎しみが再燃し手紙をすり替えるという悪事を働く。最後は父とともに地頭に罰せられる。物語に一貫して描かれているのは、継母の継子への憎しみである。関(1978)の上げているヨーロッパの手なし娘の手が切られる理由の1つである「母の娘に対する嫉妬から」をあげるまでもなく、憎しみの奥にある感情は継子に対する嫉妬と理解できる。小人の家に住む白雪姫を執拗に殺そうとする継母を彷彿とさせる(この場合継母である王妃は魔女であるが)。「女性の想像力の敵は女性の嫉妬である。なぜなら、父権制社会において女性はいつも男性のことがかり気に向け、男性に気に入られようとするからである。それで女性たちはお互いにライバルなのである」と豊田(Toyoda, 2006)が述べることは日本の話においても当てはまる。

生みの母が亡くなってすぐ後妻に入った継母にとって、嫉妬の対象は、娘のみならず、娘を通して亡くなった実母の面影だったのかもしれない。継母は、すでにできている父と娘の関係の中に入り込むことが

できなかつたとも考えられる。そのため、継母が父である夫と安心した関係を築くためには最初の妻の面影を感じさせる継子を追い出すほかはなかった。継子との関係の悪さの背景に夫との関係の不安定さがある。物語の中では、父は継母の言いなりであるように見える。確かに継母は力の強さで父をその支配下に置いている。しかし、それは本当の意味で継母が満足する関係ではない。継母が望んでいるのは、対等の関係であり、子の世話をする母としてではなく、一人の女性として認められることである。この関係が変わらないうぎり、たとえ継子を追い出しても不幸のままである。それゆえに、継子が生きていたと知った時、憎しみが再燃したと考える。ここで生じる憎しみは、継子が生きて幸せでいることへの羨望である。この感情は自らを滅ぼす。

関係性の中で生きるとき、その関係に依存している限り、嫉妬や羨望から逃れられない。継母は、夫との関係や継子への感情から自由になり、自らの道を行くしか救いの道はない。羨望を断ち切ることは難しい。しかし唯一の方法がある。それは関係に依存せず、主体的に関係することである。

Ⅶ、内的な体験としての山の生活

継子は手を切られ山に残される。手を切られるとはどのような意味があるのだろうか。フォン・フランツ(Von Franz, M.-L., 1977)によると手は行動能力であるとし、それを失うことは生への参加を犠牲にすることだという。河合(1982)は、文字通りの「縁を切られる」から、手が無くなると様々な活動ができなくなるというところから「外界とのかかわり、外界へのはたらきかけに大きい障害をもつ」と敷衍する。また、織田(1993)は攻撃性と受け身性の切断であると境界性人格障害の治療論の立場から述べる。豊田(Toyoda, 2006)は手とは女性的な創造性と精神性を表し、男性性優位の社会の中で失ってしまったものという。

ここでは、女性の個性化という視点で考察を進めていきたい。河合の述べるように文字通り娘は両親から「縁を切られた」。父はすがりつくことができないように娘の手を切り捨てた。親からの分離である。親の元にいたいという娘の愛着を徹底的に断ち切るためである。親離れは、親が子を突き放すことによって成し遂

げられる。手を切られ山に残された娘は「ああ、悲しい。何で、まことの父さまにまで、こんなひどい目にあわされるのか」と思って、もう帰る家もないので、谷川の水で切られた腕の傷口を洗って、草の実や木の実などを食べて生きながらえていた。この娘の言葉に対して、自分の意志で家を出ていくグリムの娘と比較して、「主人公は自分の運命を受け入れていない」(Toyoda, 2006)、「決意はあいまいにされながら、悲しみやうらみが述べられる」(河合, 1982)、「両腕を切られた悲しみを意識していた」(織田, 1993)と説明する。グリムの娘が自分の意志で親と訣別するのに対して、この娘は突然自分の意志に反して親からその愛着を剥奪されたのであり、その思いがうらみや悲しみとして表現されたと考えることができる。

確かにこの言葉には娘の愛着を剥奪された気持ちが表現されている。しかし、娘は絶望して泣き崩れて終わるのではなく、立ち上がって次の行動をおこす。切られた傷口を自分で洗うのである。筆者はここに、両親から離れ自立しようとする一歩を見る。関係をとことん断ち切られることによって、内側からの主体性が発現したと考える。初めは悲しみやうらみであったが、「帰る家がない」と悟り自力で生きていくことを決心したのである。山にある草の実や木の実を食べてまさに自活する。

山の中で手を切られるという行為は、他の継子とは異なる体験へと娘を誘う。山は人が生活する日常から離れた空間である。そして、手を切られたことは人間としての生活を難しくする。特に人との関わりを遮断する。娘は二重の意味で、人から隔絶されたのである。この中で、生き残るための努力をする。グリムの娘が人の守りのある王の庭で空腹を静めるのとは大きな違いである。

山は谷川の水で彼女の傷を癒し、草の実や木の実で彼女の飢えを満たす。自然は母なる自然の子供として他の動物と同じように娘を養い育んだと思われる。ここで、彼女は自然の中で自然の一部として自然と同化した体験をしている。自然の中で、自然を搾取するのではなく自然と共生する知恵、人間としての知恵ではなく自然として生きる知恵を学んだのではないか。

自然の中で生きることは人間関係を見直すことにもなる。自然という次元から人間関係を見るとき、異なった視野が開けるのではないだろうか。両親に「捨てら

れた」という意識は残るものの、悲しみとうらみという感情は、昇華されていくのではないか。継母が人間関係のしがらみゆえに憎しみという感情から逃れられないことと対照的である。

この山での体験を織田(1993)は「心理化」という現象が生じたと解釈する。織田によると「心理化」とはユングの用いた言葉であり、ユングは直接的で衝動的な本能表現を元型的で心理的な表現に変容させることを「心理化」と呼ぶという。織田は、本能的なものに限定せず、「私たちのさまざまな経験を、心理的な現象として体験すること」とし、「このときしばしば、私たちは心理的な体験に主体的に向き合おうとする」と述べる。「両親との関係の中に生き、自分に直面してこなかった手なし娘には、はじめて心理的な自分を生きる機会が訪れた」と説明する。すなわち「親との関係を心理的な現象として直面し始める」という。これは、日本の手なし娘だけに当てはまることではなく、グリムの手なし娘にも蛇婿入り水乞型の娘にも鉢かづきにも当てはまると織田は述べる。

この織田の指摘する心理化について、親から離れることによって「親との関係を心理的な現象として直面し始める」という意見に関しては筆者も賛成である。しかし、この手なし娘の山での体験は、織田が述べた以上の深い体験が含まれる。手なし娘には親に捨てられるという親との関係の距離化のみならず、手を切られて他者とつながることができないという他者との関係の距離化が生じている。それは他者との関係の距離化ゆえに自分の内側に向かわざるをえないことによって得た体験である。結婚後家から追い出され一人で過ごすことについてフォン・フランツ(Von Franz, M.-L., 1977)や織田(1993)が解釈するような体験を手なし娘はこの山の中でも体験したと筆者は考える。手なし娘は山で生きるという体験の中でフォン・フランツや織田が指摘する宗教体験、すなわち内なる自己との出会いをしたのではないかと思う。

Ⅷ、人と人の心情の交流

娘は山の中で通りかかった若者と出会い結婚する。若者の母も娘をかわいがり、娘は手を無くしたままであるがよい夫とよい母に囲まれ幸せな生活をする。そこに子どもが生れることになる。しかし、若者は母に

娘を託して家を離れ、継母の手紙のすり替えによって、手なし娘は家を出ることになり、さらなる個性化へと向かう。

河合（1982）は山の生活後の夫と母の生活について「孤独の果てに母性との関係を取り戻し、幸福な結婚をし、子どもさえできることになる」と肯定的な母性を体験したことを述べる。織田（1993）は母の援助を守りの母としての体験とする一方、若者との結婚が心理的結合の意味を持ち、子どもの誕生が失った手の回復の契機を与えるものととらえる。

筆者は河合と織田が述べる母性の体験と異性との結合というだけでない重要なものがここに描かれていると考える。この話では、若者と出会い結婚し子どもができ家を出るまでの娘の若者と母との交流が丁寧に語られている。そこにこの昔話の神髄があると考えている。別のところでも論じた（千野、2007）が、ここでも述べておきたい。

若者は父に見捨てられたかわいそうな娘ゆえに家に連れて帰る。若者の母も心のやさしい人ゆえに娘をかわいがり、嫁にする。この物語に流れているのは、グリムの神への信仰心とそれに応える神の恵みではなく、若者やその母のかわいそうなものに対する思いやりの心であり、それを感謝して受け取る娘の心である。つまり、この話の中心として語られているのは、人と人の心情の交流なのである。娘は最後にこのような言葉を残して家を出ていく。「母さま、この片輪者のわたしにかけて下されたご恩返し一つ出来ないで、出て行きますことは悲しいことだけれども、若さまの心とあればいたしかたありません。出て行きます」。

河合（1982）は彼女の「耐える在り方が鮮明に浮かび上がる」と述べ、織田（1993）は「見捨てられ感情を体験する」と述べるが、果たしてそうであろうか。筆者は異なった見解をもつ。グリムの娘はただ目を泣きはらして立ち去るだけであったが、このような言葉を述べるとはなんとという強さであろう。ただ耐えているだけではなく、また見捨てられ感情を表現しているのでもない。ここには彼女の決意が表現されているのだ。父に捨てられた娘はいつのまにか自らの意志を持つ強い女性に変化したのである。この強さは、幸せを剥奪されたことをうらんで他人を攻撃するのではなく、今までの恩を有り難いと感謝しつつこの境遇を受け入れて行動する強さである。この強さは人と人の心

情のやさしさの中で育った強さである。神と人間という上下の交流でなく、身分の立場の違いはあるかもしれないが、同じ人間としての立場の交流である。同じ立場の者が同じ地平に立って相手のことを大切に思う気持ちからの交流である。そこには悪魔同様継母の悪意もつけ入る隙がない。母や若者に対する感謝の心は揺らがないのである。

娘の強さは、人と人の心情のやさしさの中で育ったと述べた。それは、娘が母や夫の行為を素直に受取り感謝する心を持っていたからである。相手が思いやりを持ちやさしく接しても、これをやさしさとして受け取る感受性がないとこの交流はできない。また、そのやさしさを感じても、逆につけ上がり傲慢になる場合がある。むしろそうなることのほうが多い。この娘が感謝の心を持つことができているのは、それまでの山での生活の体験によると考える。自分に向き合う中で、他者という人が存在することのかけがえの無さを実感したと思われる。一人でいるという孤独の中でこそ他者の大切さと必要性を感じることができるのである。人との関係のしがらみの中にいる継母にとって、とうてい感じ取ることのできない在り方かもしれない。

Ⅷ、この物語が語る宗教性

家を出た娘は、水を飲もうとして、背中に負ぶっていた子どもがずり落ちそうになり、無い手で押さえようとしたその瞬間、両手が生えて、しっかり子どもを抱きかかえる。

無くなった手が回復する場面である。この瞬間に娘に何が起きたのかについて考察したい。河合（1982）はこの場面を、今まで耐えに耐えて、受動的に行動してきた彼女に「能動的な行為が自然に、もっとも不可能なところに生じ、しかもそれは可能となった」とし、自ら母としての深い体験をしたと解釈する。確かに、子どもを母が助けるというのはきわめて母性的な行為であり、母が子を思う行為ゆえにこのような奇跡が生じたと解釈することも可能である。このような母性のすばらしさが強調される点は、日本のみならず、普遍的なことかもしれない。しかし、筆者はこの行為を母性的行為に限定せず、人がぎりぎりの状況の中で無我夢中で行なった行為に対する奇跡と受取りたい。

フォン・フランツ（Von Franz, M.-L., 1977）はグ

リムの主人公が、城を追いだされ、森に入り天使に会ったことについて、自然だけがそのような人間を治癒させる力を持っていて、それは隠遁者にも似ており、孤独の中で直接的な独自の宗教体験へ導かれると述べる。さて、前述したように、すでに日本の手なし娘は山での体験においてこの体験をしていると筆者は考えている。山という自然の中で一人孤独に生活するのは、まさにここで述べられている体験である。この宗教体験は、グリムの娘のように直接天使に出会う体験ではないが、自分に向き合い内的な自分に出会う体験である。

織田（1993）はここでの体験を宗教体験として位置づける。「宗教体験とは、私たちの知的な判断や世間的常識的なものを全て投げうって、自分自身に向き合うことである」とし、この場面では、背中から落ちようとするわが子を見ると同時に心の中の親と対決をし、自分の心の中に手を発見したと述べる。対決とは自分自身と向き合うことであり、対決を生きるとは、対決を心理化することである。対決はひたすら向きあうという意味で宗教的な体験でもあると織田はまとめている。

織田（1993）は山での体験は心理化の現象とし、ここでの体験を宗教体験として論じている。筆者は、むしろ織田のいう宗教体験は山での体験であると考え、娘は山の中に一人で生きているとき、自分と向き合うという対決をすることによって内なるものと出会ったと考える。それゆえにこそ、母と夫との交流が行なわれ、家を出るときにあのような言葉を母に語る事ができたのである。

それでは、この体験をどのようにとらえたらよいだろうか。筆者もある種の宗教体験だったのではないかと考えている。子どもがずり落ちそうになったのでびっくりして無い手で押さえようとした。それは一瞬の出来事であり、とっさにでた行動である。他の類話にあるように手を回復するために意識的に行った行為ではない。ただひたすら子どもを助けようとしただけである。そこにあるのは無心である。この心の在り方は意識的に作り出そうとしても作り出すことはできないまさに一回性のものである。筆者にはこの無心の状態そのものが宗教的体験だったと思われる。その時にこそ不思議が生じた。これを人がおこした奇跡と呼びたい。

その後、社で神に一心に祈っている娘と捜しにきた夫が再会する。娘の祈りは感謝の祈りであり、願いをかなえてもらうための祈りではない。その無心の祈りの時に奇跡ともいえる再会が可能となる。2人の喜びを表現するように花が咲いた。人と人がおこした不思議である。今までの歩みはこの奇跡への道程であったといえる。

手なし娘は無くした手を回復し、夫と再会した。それは単に元の状態に戻ったのではなく、宗教的な体験を内に持ちつつ日常生活を送るというより深い次元での生を手に入れたのである。

手なし娘が子どもを抱こうとしたとき、また祈っている手なし娘が夫と再会したとき、奇跡といえる不思議な出来事が生じた。けれどもそこには具体的な神の存在は語られない。それは人がおこした奇跡といえることができる。しかし、その不思議な出来事に見えない力が働いていることは確かである。この力を「神」と呼ぶことはできるが、今まで述べてきた特定の神とは違う何かである。また、グリムで語られているように神を信仰することによって神の恵みを得るといふ信仰の証としての奇跡ではない。信仰の証ではなくその人間が行った行為に対して「神」が与えた奇跡である。この「神」は見返りを求めない。それゆえに見返りを求めない無心の行為に対して奇跡がおきたのではないだろうか。

若者は娘に出会ったときかわいそうだと思って家に連れて帰り、若者の母も心のやさしい人ゆえに娘の世話をした。ここには人と人の心情の交流が描かれていると述べた。これは、まさに見返りを求めない無心の行為である。このようなことのできる心の在り方の中に筆者が述べる宗教性が存在していると考え、日々の生活、人との関係においても、敬虔な態度をもって生きており、その態度そのものが宗教的である。この行為や在り方に対して、「神」の力が働いておきた奇跡と思われる。このような宗教的な在り方が存在するのがこの昔話である。

X、終わりに

「手なし娘」には、さまざまな宗教性が表現されている。グリムの「手なし娘」には明らかにキリスト教的色彩が強く、信仰が強調されていたが、同じ初版で

はキリスト教が広まる以前の自然崇拝的要素もうかがわれた。また、日本の「手無し娘」においても、日本独自の宗教を取り入れているものがある一方、自然信仰の要素がうかがわれるエピソードもあった。また、主人公の体験として、グリムの娘も日本の娘も、ともに宗教体験といえるものを体験していると考えられることができるが、その体験の在り方は異なっている。グリムの娘は直接天使と出会う体験であり、日本の娘は自分と向きあう体験である。そして、ここで取り上げた「手なし娘」には、グリムとも他の日本の「手無し娘」とも異なる宗教性が描かれている。

この昔話には日々の生活や人との関係を有り難きものとして受取る敬虔な態度が描かれており、その態度の中に宗教性が流れている。ここで言う宗教性とは河合が述べる宗教性を少し広げる形ではあるが、特定の宗教を信じるという形ではなく、根源的な心の在り方をいう。特別な奇跡に対する畏敬の念のみならず、日々の生活もそのようなものとして受取り生活する態度をいう。「神」なるものは特別な奇跡の中にだけあるのではなく、日常の生活の中にあるのである。そのような精神性がこの昔話には表現されていると筆者は考えている。それは日々の生活や人との関係の中で持ち続けられている態度としての宗教性である。

この物語の語り手が聞き手に伝えたかったのは、無い手を回復したという奇跡ではなく、奇跡をもおこす人と人の温かい交流をもたらす心のありかた、宗教性ではないだろうか。

註

- 1 AJAJ2008 夏セミナーにおいて、このテーマの講演を聴かせていただいた。

引用文献

- Dieckmann, H. (1978). *Gelebte Märchen: Lieblingmärchen der Kindheit*, Kreuz Verlag Zürich. 安溪真一訳. (1992). 「おとぎ話」を生きる人たち—症例が語る心の深層, 創元社.
- 稲田浩二. (1988). 演習版・日本昔話タイプ・インデックス, 同朋社.
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編.

- (1994). [縮刷版] 日本昔話事典, 弘文堂.
- 河合隼雄. (1982). 昔話と日本人の心, 岩波書店.
- 河合隼雄. (2006). 日本の精神性と宗教. 河合隼雄・鎌田東二・山折哲雄・橋本武人. 日本の精神性と宗教, 創元社, pp.11-54.
- 織田尚生. (1993). 昔話と夢分析—自分を生きる女性たち—, 創元社.
- 関敬吾編. (1956). こぶとり爺さん・かちかち山—日本の昔ばなし (I)—, 岩波書店.
- 関敬吾. (1978). 日本昔話大成第5巻 本格昔話四, 角川書店.
- 千野美和子. (2007). 日本昔話に見る精神性. 仁愛大学研究紀要第6号, 1-11.
- 千野美和子. (2010). 日本昔話「米ぶき粟ぶき」にみる関係性. 京都光華女子大学研究紀要第48号, 11-31.
- 高橋健二訳. (1976). グリム童話全集 I, 小学館.
- Toyoda, S. (2006). *Memories of our lost Hands: searching for feminine spirituality and creativity*, Texas A&M University Press.
- Von Franz, M.-L. (1977). *Das Weibliche im Märchen*, Bonz Verlag. 秋山さと子・野村美紀子訳.
- (1979). メルヘンと女性心理, 海鳴社.
- 吉原高志・吉原素子訳. (1997). 初版グリム童話集 1, 白水社.

